

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX 011-210-5826

NIE 拡大 どうすれば



NIEの課題などについて話し合った道内のアドバイザー

3年ぶりアドバイザー会議 18人実践へ知恵絞る

道内のNIEアドバイザーが集まる北海道NIEアドバイザー会議(北海道NIE推進協議会主催)が1月21日、北海道新聞本社(札幌市中央区)で3年ぶりに開かれた。アドバイザーのほか協議会加盟社代表ら18人が参加し、どうすればNIEが広がるかなど懸案や課題について話し合った。

会議の開催は、2015年1月以来3年ぶり2回目。この日はアドバイザー8人、高辻清敏協議会会長、同協議会加盟社代表5人、同事務局4人が出席した。

8月に北海道セミナー 指導要領で講演会

NIE第4回北海道セミナー(北海道NIE推進協議会主催)が、8月17日午後1時から、北海道新聞本社(札幌市中央区大通西3丁目6)で開かれる。

3の6)7階特別会議室で開かれる。

今回は教育ジャーナリストの渡辺敦司さんが講師になり、新学習指導要領改訂をテーマに講演する。日本教育新聞社として、文部省(現文科省)などを担当し

ら提供された英字新聞などNIE関連資料の持ち帰りコーナーは好評だった。今後の課題は小中高の連携を強めること」と活動を振り返った。

各アドバイザーからの報告と意見交換では、実践者が転出するとその学校の活動が途絶えてしまうという以前からの大きな課題が複数の参加者から報告された。それに対し「トップダウンでないと広まらない。教育行政の理解を得てNIE予算を付けてもらうのが近道」「やりやすい実践は広まりやすい。はがき新聞が例」「特別支援教育ならいろいろな事ができる余地がある。2年くらい前から特別支援の先生からのニーズが高い」などの意見が出された。

地域の組織作りや勉強会開催の参考として、長年安定した活動をしている北海道十勝新聞教育研究会の運営方法などへの質問もあった。

このほか会議自体の内容について「アドバイザー個々の実践の紹介ではなく、どうすれば拡大できるかを話し合う会議にしたい」という意見が出た。

「大学でNIEを考える会」の第3回会合が3月8日、北海道新聞本社のNIEプラザで開かれ、道内の大学関係者らが新聞活用にかかわる各大学での取り組みや課題など、幅広く意見を交わした。

学生も新聞活用を 大学のNIEを考える会

北海道NIE推進協議会



大学でのNIE教育の課題や重要性について意見を交わした出席者

フリーに転身。現在は教育専門誌やサイトなどで学力や家庭学習を記事を書き、発信している。

「大学でNIEを考える会」の第3回会合が3月8日、北海道新聞本社のNIEプラザで開かれ、道内の大学関係者らが新聞活用にかかわる各大学での取り組みや課題など、幅広く意見を交わした。

各自の取り組みとして▽新聞機能を「地方創生」「シチズンシップ教育」に生かす狙いで、新聞づくりを中核においたワークシヨップ的授業を18年度の開講する(北大)▽新聞投稿を通じて事実と意見の書き分けなどの型を学ばせている(文教大)▽新聞記事をネタ元にドキュメンタリーを制作(北星学園大)▽北海道新聞のNIE寄付講座が集中講義の形式で行われた(教育大釧路校)などが報告された。

意見交換では「学生は授業で一時新聞を読んでも、授業が終わると読まなくなる」「情報収集はネットで十分だと思っているが、適切な情報にたどりつく検索能力は劣っている。それに気づかず、集まった情報がすべての情報だと思ってしまう」などの現状を懸念する声が出た。

スポーツ報道の今を知る 道NIE研冬季研修会



北海道NIE研究会(上村尚生会長)主催の第2回NIE実践交流会「冬季研

修会」が1月5日、北海道新聞本社(札幌市中央区)で開かれた。講演や実践発表から、報道や新聞の活用について学んだ。道内の教師ら30人が参加した。最初に北海道新聞運動部の小野高秀部長が「スポーツ報道の現場から」と題して講演した。

スポーツ取材の経験が長い小野部長は「最近ではスポーツ面だけでなく社会面にもスポーツがよく載るようになった」と、報道でスポーツのウエイトが高まっている現状を説明した。また、2月開幕の平昌五輪に出場する日本選手団の戦力分析のほか、プロ野球取材やインターハイなどアマチアスポーツ取材での苦労話やエピソードを披露し、「現場では時間がなく、要領よく取材するためには事前の勉強が必要」と話した。

このほか昨年10月5日に札幌市立陵北中で行われた道NIE研主催の第22回北海道NIE研究会大会(兼第2回NIE札幌地区セミナー)について、札幌市立中央中の古畑理絵教諭が、成果と課題を報告した。さらに同市立あいの里東中の結城学教諭が「社会科における新聞活用」として実践発表を行った。その後実技研修会が行われ、参加者がグループに分かれて、新聞を活用した道徳の指導案作りを実習した。

実践指定校まず25校

日本新聞協会と北海道NIE推進協議会が認定する2018年度の「NIE実践指定校」の内定が進んでいる。新聞協会による指定校は32校を募集しており、3月20日までに25校が内定した。前年度からの継続校が19校で、新規の指定校は6校。同協議会独自の指定校として3校が内定している。指定校には新聞各紙がそれぞれ一定期間無料提供され、NIEの取り組みに活用される。道内の実践指定校は5月中旬までに新聞協会指定の7校、同協議会による2校の独自指定高の内定が固まる見込み。内定校の代表者は、5月12日午後1時30分から、北海道新聞本社で開かれる同協議会の18年度総会に出席し、情報交流を深める。

NIE実践奮闘記

好評だった「出前講座」

旭川北高教諭 毛利禎晴



たのだ。昨年12月13日、読売新聞朝刊が生徒や教員の人数分が、職員室に届いた。生徒よりも先生方が驚いていた。授業終了後、先生たちの間では「やはり、同じ日付の新聞を使うっていいね。キーブもしなくていいし」などと笑顔で語ってくれた。私が担任をしている1年生の中には新聞を初めて開いたという生徒も複数お

の佐藤洋樹報道部長の派遣と2月2日の実施が決まった。この日は卒業を控えた4年生を除く、在校生と教員が一堂に会して佐藤報道部長の講演を聞くことになった。年末に支社に出向いて佐藤部長と打合せをした。とにかく、新聞を読む習慣がなく小学生レベルだと思つてやってください」とお願いした。新学期がはじま

を目にする。昼過ぎに出勤した私のところに全日制新聞局の顧問が「NIEやるんですか」と駆け寄ってきたので、講演の紹介をしたところ勤務時間外にもかかわらず参加することになった。佐藤部長は持ち時間の45分をめいっばい使い、新聞の読み方について平易に講演してくれた。初のNIE出前講座は無事、終了した。生徒の感想文には「新聞に興味があった」「家にあるのでちゃんと読みたいと思う」「見方が少し変わった」「新聞作成の工程がわかった」など前向きなものがあった。この反応に気を良くして、生徒に新聞を読む習慣を早めに身につけてもらおうと、18年度は夏休み前の早い時期に出前講座をお願いしようと考えている。

平易な講演／読む習慣付けに一助

札幌を離れ、12年ぶりに道北に戻ってから1年がたとうとしている。勤務校の旭川北高校定時制(生徒数47人)はNIEを総合的な学習の中で「新聞学習」という名称で位置づけ行っている。対象は1〜3年生で、12月と2月に計2時間を割り当てている。幸か不幸か「新聞学習」は地歴公民科の教諭が担当のため、着任したばかりの私の担当になった。

が、以前、ある研究会で耳にした「学校教材用は安く手に入る」ということを思い出し、読売新聞を申し込むことにした。というのも2月の2回目には北海道新聞の出前講座をと考えていたので、NIEはバランスが肝要と判断して複数紙にし

り、悪戦苦闘しながらもシートの設定に取り組んでいたのが印象的だった。

さて、2回目の「新聞学習」は予定どおり北海道新聞NIE推進センターに出前講座を依頼した。ほとんど北海道新聞旭川支社

◆ ◆ ◆
聞けば、以前は各担任が自ら購読している新聞(すべて北海道新聞だったそう

◆ ◆ ◆
私は秋から、計画を立て昨年12月の1回目は今までの流れに敬意を表してワー

◆ ◆ ◆
私は秋から、計画を立て昨年12月の1回目は今までの流れに敬意を表してワー

◆ ◆ ◆
聞けば、以前は各担任が自ら購読している新聞(すべて北海道新聞だったそう

◆ ◆ ◆
聞けば、以前は各担任が自ら購読している新聞(すべて北海道新聞だったそう

◆ ◆ ◆
聞けば、以前は各担任が自ら購読している新聞(すべて北海道新聞だったそう



川端裕介さん

一斉にまわしよみ新聞を行う児童たち



第13回胆振地区・登別セミナーが昨年12月8日、登別市の市立富岸小学校で開かれた。5年の国語の公開授業では、児童の「まわしよみ新聞」について、出席した教員らが高い関心を示した。

同小の牧野広太教諭は、担任のクラスで学級新聞づくりを進めている。まわしよみ新聞も日常的に授業で取り入れ、気になった記事や広告、写真を切り抜いて貼る新聞を仕上げていく。

今回は「言葉について考える」をテーマに教科書に沿って、まず分かりやすい

文章を考えた。①主語と述語を合わせる②一文を短くする③同じ言葉を繰り返さないーなどのルールが役立つと児童が学び、続いてグループ別でまわしよみ新聞を行った。

複数紙から天皇陛下退位に伴う10連休の可能性や環境問題、ノーベル文学賞などの気に入った記事を選び、それを要約し、文章表現にも気を使った。牧野さんは児童の家庭で新聞未購読者が増える現状に触れながらも活用し「学級新聞づくりや作文などにも生かしていきたい」と話した。

授業後には出席者が「児

童があれだけ短時間に読み、まとめている。継続的に取り組んでいる成果が出ている」などと高く評価をしていた。

実践発表では伊達市立光陵中の安藤素子教諭が新聞コラムを書き出す授業を続けた結果、間違いが劇的に減る効果があったとした。続いて室蘭栄高では新聞局顧問の工藤知美教諭が、多角的な視点で記事を整理し書くことは、新学習指導要領が目指す「深い学び」に役立つと語った。

2017年度の北海道NIE推進協議会主催の地区セミナー全10回は胆振・登

[illegible]

新聞活用で深い学び

十勝新聞研で講演会

N I E アドバイザーの川端裕介さん〓函館市立亀田中学校〓が、これまで書き続けてきた学級通信を教師向けにまとめた手引書「クラスが輝く 365日の学級通信」を出版した。2013年度以降、クラス担任としてパソコンのソフト・ワードを使い学級通信を発行してきた。昨年、学級通信などの全国コンク

アドバイザー
川端さん出版

では16年度の発行分が最優秀賞を受賞。明治図書出版（東京）の編集者の目にとまり、出版が決まった。



置き、原稿は見出し付きのカラー新聞。B5判の裏表で中体連出場時は「笑顔も涙もすべて宝物」、期末テスト前は「誘惑に勝ち机に向かおう」と生徒に温かい視線を向けている。自前の写真も使い、出版本では制作のアドバイスも添えた。

編集作業は週末に行い、発行は月曜を心がけた。生徒の保護者への配布を視野に年間発行50回を目指した。川端さんは「子どもたちに一番伝えたいことは新聞の見出しを意識して作ってきた。子どもたちが新聞を読める一助にもなってくれば」と話す。

B5判。167ページ。大型書店などで扱っている。2100円（税別）

研究会の上村会長 児童に最後の授業



A photograph of a male teacher in a dark suit standing at the front of a classroom. He is holding up a large newspaper with both hands, displaying it to the class. The newspaper has a large, bold headline. Several students are visible in the foreground, seen from behind, looking towards the teacher. The classroom has a green chalkboard in the background with some papers pinned to it.

れた「災害弱者 近所で守る」の回答欄付きワークシートを教材に、読み終えた後に自分の考えを持ち発表する「課題解決型」の授業を3クラスで行った。

教育実践講演会「新聞を活用した言語活動が創造する深い学び」が2月10日、帯広市の十勝毎日新聞社で開かれた。国語教育が専門の達富洋二・佐賀大教授が、

北海道NIE研究会の上村尚生会長が3月上旬、校長を務める札幌市立星置東小で、6年生に対し新聞記事を使ったNIEの授業を行ったⅡ写真Ⅱ。毎年、卒業直前に開講してきたが、本年度に定年を迎え、今回が最後の贈り物になった。

2011年3月、北海道新聞朝刊の生活面に掲載さ

た。また災害への備えで何ができるかについて児童は「あらかじめ避難場所を確保しておく」「地域でしっかりとあいさつする」などと回答し提出した。

授業導入部で新聞購読についての質問では政治面をよく読むとの回答が数人あり、関心の高さを示した。

上村さんは「ワークシート

教授は物語を読ませて、新聞の読者投稿風のような感想文を書かせたり、登場人物を新聞の人物紹介欄のようにまとめさせた授業を紹介し、「形式のコピーにとどまらず、子供たちが頑張っている授業が望まれる。新聞を手近な材料と考えて活用したい」と提言した。

新聞づくりの場を提供



記者となって新聞作りを楽しむ小学生

子供たちは1人、または友達と手をつないで複数のブースをめぐる。「たくさんのお金をもらえない」と仕事の厳しさを感じつつ、「仕事でいろいろなことができて、もらった給料でしたいことをたくさんできるから、働くことは大変だけれど楽しい」と話す。「将来なり



子供たち笑顔で記者体験

苦小牧民報社 編集局 編集総務部長 魚多利浩

苦小牧民報社は2012年度から、毎年秋に苦小牧市内の大学や高校の体育館を会場に開かれる「とまこまいキッズタウン」(同実行委員会主催)に出展している。子供たちの職業意識を高めようと、さまざまな仕事を体験してもらおう催しで、弊社では子供たちに新聞記者体験の場を提供し、新聞を作る意義や楽しさを伝えている。

◇ 「とまこまいキッズタウン」は、北海道コカ・コーラボトリング(本社札幌市)が自治体などと協力して各地で開いている教育活動。苦小牧駒沢大学や苦小牧高等商業学校の体育館を会場にし、ここを一つの街に見立て、公的機関のほか、市内の警備会社や飲食店、薬局などが25前後のブースを設け、参加対象とする小学3、4年生が、希望のブースに行き、働く体験をし、疑似通貨の「給料」を受け取り、食事や買い物を楽しむ。毎年約500人の児童が参加しており、会場は熱気に満ちる。

◇ 記者体験ができる弊社のブースでは、まず子供たちに記者とカメラマンの2人

1組になってもらう。他のブースに行つてその仕事について取材し、写真を撮つてきてもらう。記事は子供たちが取材でメモしてきた内容を基に弊社で構成。写真は良いものを選び、記事に付け、A3版のカラー判新聞1枚を作っている。

◇ 「どんな写真が見た人により伝わるか考えて撮つたよ」「分からなかった事はもう一度聞いたんだ」と仕事に対する子供たちの姿勢は大人顔負け。「(取材相手が)すぐ質問に答えてくれないと大変ですが、いろいろな話を聞けて楽しかった」「聞いたことを早くメモするのが難しかった。でも、いろいろな所に行けていろんなことができる面白い仕事だった」と笑顔で話す。

◇ 出来上がった新聞は、子供たちの手で取材したブースに届けてもらい、「読んでもらう喜び」も体感できるようにしている。給料を渡すのはその後だ。

◇ 子供たちがブースにやって来てから、取材、構成、印刷、完成、給料の支払いまでに要する時間は約1時間。かなりのスピードで作業を進めるため、濃厚な時間があつたという間に過ぎる。これを5回ほど繰り返すと閉幕になる。その時にはぐっすり眠っているが、脳裏に残るたくさんの子供たちの笑顔が、明日の鋭気になっている。

釧路大生が NIE実習

道新寄付講座

北海道教育大釧路校で2月13、15日の3日間、「道新NIE寄付講座」が開講し、1、2年生16人が新聞を授業で活用することの重要性に触れた。

北海道新聞釧路支社による寄付講座。15コマのカリキュラムは同社NIE推進センターが作成し、まわしよみ新聞やスクラップ新聞、インタビューや原稿執筆



道新NIE寄付講座でまわしよみ新聞の実習に取り組む教育大釧路校の学生たち

たほか渥美清孝NIEアドバイザーが模擬授業を行った。学生は日ごろ新聞をあまり読まず、当初は新聞に対して敷居の高さを感じていたが、次第に新聞記事の多様性に気づき、スクラップ新聞づくりなどの実習に熱中した。

学生のレポートには「新聞が身近になった」「授業で使いたい」「履修してよかった」などの感想が並んだ。釧路校の内山隆教授は「授業や学級経営などさまざまな場面で活用できる内容。学生はNIEの有効性を実感できた」と話す。

編集後記

北海道NIE推進協議会が開いた「大学のNIEを考える会」は札幌市と近郊から複数の大学関係者が出席し、高等教育機関の関心の高さを示しました。

出席者からは「新聞の一覧性、網羅性が重要だが、学生がそれに気づく場がないと分からないまま」と新聞と接点がなく巣立つ学生を嘆く声も出しました。社交

かといって手放しでは喜べません。大学側の危機感に対しNIEが何をできるのか、同時にどんな効果があるのか、厳しく吟味されるからです。待ったなしの状況はなお続いています。(森)